

# 大学・附属学校園における連携活動の検討

— 家庭科を中心とした実践事例から —

尾島恭子・綿引伴子・松田洋介・滝口圭子・

橋本正恵・西多由貴江・中村正寛・中田泉

## A Consideration of Collaboration with University and Attached Schools ; A Case Study of the teaching Practice of Home Economics

Kyoko OJIMA, Tomoko WATAHIKI, Yosuke MATSUDA, Keiko TAKIGUCHI,  
Masae HASHIMOTO, Yukie NISHITA, Masahiro NAKAMURA, Izumi NAKATA

### 1. はじめに

幼小連携、小中一貫教育等、異校種の連携については、その重要性が唱えられて久しい。それに伴い、異校種間の連携に関する研究および実践は、近年多く蓄積されるようになった。

翻って、金沢大学は、附属学校園（幼・小・中・高）が同じ敷地内に設置されているため、園児・児童・生徒の異校種間の移動が物理的に容易である。しかし、本研究で扱う教科「家庭科」においても、実態として各校の交流が積極的に実施されていたというわけではない。その背景には交流の「きっかけ」がなかったということも挙げられる。そこで、近年の異校種連携の動きを鑑み、大学教員がコーディネートをすることで、各学校園の連携を実現させることとした。

ただし、近年蓄積されている実践の多くは、連続する異校種間で、特定の学習内容に関して、円滑かつ効果的な教科内容の連携を図るためのカリキュラムの構築を意図しているものが多く、さらにその実践には、未ださまざまな壁があることが指摘されている。例を挙げれば、担当教諭の「負担感、やらされ感」や「努力の割には結果が芳しくなく、これでいいのかと不安を抱き、士気を喪失し、意欲を失ってしまう」ことや、「成果の評価に関してどうしていいか悩んで

いる」ことなどである<sup>i</sup>。そのような中、特定の学習内容に関して、円滑かつ効果的な教科内容の連携を図るため、各校園で他校園に合わせて新たな学習内容を組み入れることは、時間数的にも困難な場合が多く、教員の多忙化に一層の拍車をかけることにつながる。

本研究では、学校園の教員の負担感にも配慮し、各人が意欲的に取り組めるような連携の在り方について検討することを目的とした。本研究の最終的な連携実践は、幼・小・中の3校種による交流実践であるが、本稿ではその前段階として、金沢大学人間社会学域学校教育学類の附属幼稚園と附属中学校の異校種間実践を報告する。

なお、本研究は、金沢大学学校教育学類・附属学校園研究推進委員会の技術・家庭科小委員会（委員長；綿引伴子）にて2012年度の連携事業を検討する中で着想し遂行されたものである。

### 2. 研究計画・研究方法

本研究では、「場の連携」と「内容の連携」の二つの視点から連携を捉えた。

#### （1）場の連携

通常、教科内容の連携を図るためのカリキュラムの構築等を意図する場合、例えば小学校と中学校など異なった場所にて目的を一にする実

践が別々に行われることも多い。しかし、本研究における「連携」の中身として、園児・児童・生徒が同一の場において相互に関わりを持ち合うことも目標のひとつとして据えた。

そして、交流の場所は幼稚園・小学校・中学校の各ホールを使用することとした。その背景には、園児・児童・生徒の活動を分析する際、自校園での活動時と他校園での活動時の相違が比較可能となるという理由も挙げられる。すなわち自校園での活動は、緊張の度合いが低いことが想定されることもあり、他校園での実施時よりも、積極的に活動する姿を確認できると期待したからである。また、園児は小学校、小学生は中学校に出かけることにより、進学時の準備となることも期待している。逆に、自校種よりも下の年代の校種に出かけることで、自らの成長を体で感じるができよう。

## (2) 学習・保育内容の連携

本研究においては、幼・小・中で共通して取り組みやすい学習内容としてまず「食」を通した連携を考えた。「食」を通しての連携として、例えば幼・小・中・および保護者のコラボレーションにより、食生活の改善と望ましい食環境作りを目指すための食育システムの構築などの取り組み<sup>ii</sup>も見られる。ただし、冒頭で記した通り、本研究においては、新たな学習内容を組み入れることは各教員の負担が大きいと判断し、各校園が現在取り組んでいる実践、あるいは授業内容の延長に異校種間の連携実践の実現を図ることを検討した。

具体的には、幼稚園では、今回は「食育」<sup>iii</sup>としてではなく、いろいろな人とかかわりを学ぶこととして展開、また、小学校では、家庭科で扱う「日常の食事と調理の基礎」の学習内容や総合的な学習での展開、そして、中学校では家庭科の「食と自立」や保育に関する学習内容の展開としての位置づけである。また、大学教員は、コーディネートや分析を行うこととした(図1)。

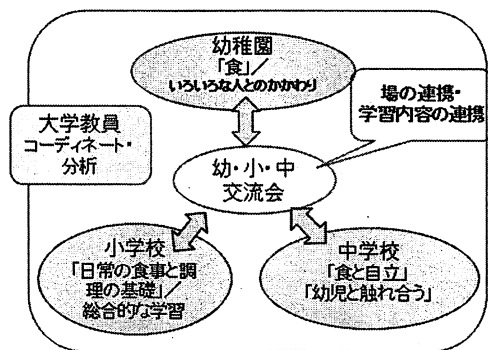


図1 本研究の枠組み

以上の研究計画を実践する前に、その試行的な位置づけの連携実践としてカリキュラムの内容・実施時期に照らして、まずは最も無理なく進められる学習内容の連携を検討し、幼稚園と中学校において実施することとした。

## (3) 幼稚園と中学校の連携実践

幼・中の連携を考えるに際し、「場の連携」においては、自校園にて活動している場合と、他校園にて活動している場合では、園児・生徒の様子も異なると思われることから、今回は、どちらかが一方的に訪問するのではなく、幼稚園・中学校の双方で連携活動を実施することとした。また、「内容の連携」については、冒頭に記したとおり、他校園に合わせて新たな学習内容を組み入れることは負担が大きいため、附属中学校の家庭科における「幼児と触れ合う」の学習内容を附属幼稚園の保育内容「いろいろな

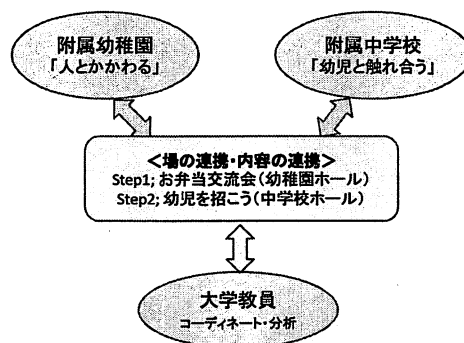


図2 本実践の枠組み

人とかかわり」と合わせ、それぞれの校園が無理なく関わりをもてるようにした。そして、幼稚園側主体の取り組みを、ステップ1「お弁当交流会」として幼稚園のホールで実施し、中学校側主体の取り組みを、ステップ2「幼児を招こう」として中学校のホールで実施した（図2）。

なお、中学校は今回の実践を家庭科の学習内容「幼児と触れ合う」の中で「幼児を招こう」を目標とするための授業計画で進めた。具体的な指導計画は下記のとおりであり、幼児の心身の発達や遊びについて学び、それを活かして幼児を招く企画を検討し、実践した。

下記にある通り、お弁当交流会は授業時間外の活動として考えるものの、幼児を招くまでの準備段階として位置付けた。

第1次	幼児を招こう:計画編		
	第1時	幼児を知ろう	2時間
	第2時	幼児の遊びを考えよう	1時間
	第3時	幼児を観察しよう	1時間
	第4時	幼児についての疑問を解決しよう	1時間
	<お弁当交流会>		
第2次	幼児を招こう:実践編		
	第1時	計画をたてよう	2時間
	第2時	準備をしよう	1時間
	第3時	幼児を招こう	1時間
	第4時	活動を振り返ろう	1時間

表1 中学校「幼児を招こう」指導計画

### 3. 実施内容

#### (1) お弁当交流会

本校園の昼食はお弁当である。園児は普段は園の友達とともに食事をしている。そこで、普段食事をともにすることのない、友達ではなく、

さらにきょうだいでもなく親でもない「中学生」とお弁当を食べることで、普段と異なる食事風景に新たな発見やかかわり合いができることを期待した。また、場所については幼稚園で行うため、見慣れた場所での食事である故、園児の緊張も幾分和らぐのではないかと考えた。

一方、中学生は、前述の通りその後続く「幼児を招こう」の準備段階として本交流会が位置付けられる。とくに、幼児に関心を持ち適切に関わることができるか、園児との関係をどのように築いていくのかに注目することとした。また、毎日のお弁当がとても小さな女子中学生も多く見受けられるので、中学校家庭科の「食生活と自立」との関連からも、園児のお弁当を見て、自分たちのお弁当の大きさや中身について栄養素の観点からも改めて考える機会を持つことができるのではないかとということも期待した。

お弁当交流会の具体的な日程とクラスは下記のとおりである。

日 程	幼稚園のクラス	中学生のクラス
5月9日	さくら組(4歳児)	3年4組
5月19日	すみれ組(4歳児)	3年3組
5月23日	ほし組(5歳児)	3年2組
5月29日	つき組(5歳児)	3年1組

表2 「お弁当交流会」の日程

いずれの日程も、12時35分～13時15分、附属幼稚園のホールにて園児・中学生数人が一つのグループとなり、お弁当を食べながら交流した。園児がホールにて3人ほどのグループを8班つくり、シートに座しているところへ、中学生が4～5名ずつ座っていく（写真1～3）。



写真1 お弁当交流会①



写真2 お弁当交流会②



写真3 お弁当交流会③

## (2) 幼児を招こう

中学校家庭科の「幼児と触れ合う」の学習内容の最終段階として、実際に幼児を招く場面である。その前段階として、前述(1)の交流会

も位置づけられるが、そのほかにも中学生が幼稚園を訪問し園児の観察等を通して、幼児の発達段階に合わせた企画を考えさせた。

なお、中学生と園児との組み合わせは、本研究の連続性を意図して、お弁当交流会と同じ顔合わせとした。

具体的な日程は下記の通りである。

日程	時限	幼稚園のクラス	中学生のクラス
7月17日	2時間目	さくら組(4歳児)	3年4組
7月18日	2時間目	すみれ組(4歳児)	3年3組
7月19日	2時間目	ほし組(5歳児)	3年2組
7月19日	4時間目	つき組(5歳児)	3年1組

表3 「幼児を招こう」の日程

いずれの日程についても、担当クラスの中学生数人が授業開始後に園児を迎えに幼稚園まで行き、園児を連れて中学校のホールに戻ってくる。その後、事前に企画した内容を実践するというものである。

本企画は、前記表1に示すように「幼児を招こう」の連続した授業計画の中に組み入れられているものであるが、幼児を招くために各クラスで議論しながらクラス毎に計画を立てた。計画を立てる段階で、中学生が実際に幼稚園を訪問し、幼児を見る機会を得ていたのだが、参観・観察するだけではわからない部分は多いため、不明な点は事前に幼稚園教諭に質問することとした。

各クラスの企画内容としては、図3に挙げるように、3年1組は、全体でじゃんけん列車で遊んだ後、2グループに分かれて紙飛行機つくりとトッピングしたクラッカーをおやつで食べ、最後に全体でしっぽ取りゲームを行うというもの、3年2組は、前半は紙芝居・爆弾ゲーム・おにごっこ、後半は紙芝居・新聞じゃんけん・ドッジボールの各3ブースから園児が自由に選んで遊ぶというもの、3年3組は、テーマを「焼

きそばパン」として、焼きそばパンの紙芝居、焼きそばパン作りの後、試食するというもの、3年4組はホットケーキ作り、焼きおにぎり作り、どら焼き作り、型抜きクッキー作り、サンドウィッチ作り、ワニたたきゲームの6つのブースから園児が自由を選んで遊ぶというもののである（写真4～6）。

企画の立案・検討については、できるだけ生徒の主体性を尊重し、生徒自身で決定するようにした。

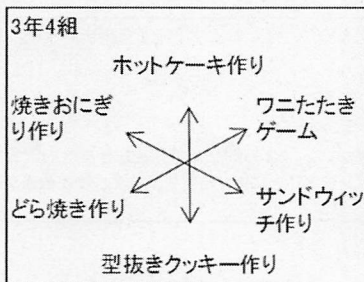
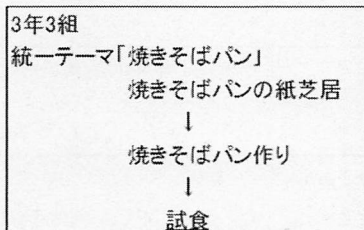
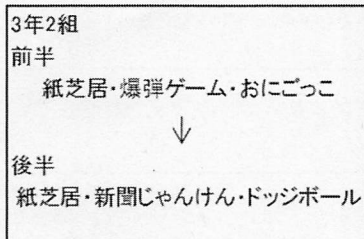
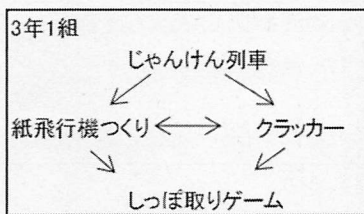


図3 各クラスの企画



写真4 幼児を招こう①



写真5 幼児を招こう②



写真6 幼児を招こう③

#### 4. 実践の振り返り

2つの実践についての各組の状況を、幼稚園・中学校の担当教諭の感想・コメントにて紹介する（表4、表5）。どの組も楽しく過ごせたようであるが、中には思うように活動できなかったグループもあった。

ほし組 (5歳児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>爆弾ゲームがよかった。ドキドキだが触れ合うのがよかった。</li> <li>司会が臨機応変に行っていた。</li> <li>ドッジボール、鬼ごっこは、ルールの理解がむずかしかった。ペアで動くなどルールを変えるとよかった。</li> <li>園児はお兄さんお姉さんたちとじゃれ合って遊びたいと思っている。</li> <li>中学生が多様な遊びを体験させてくれた。その後幼児が「紙芝居を作りたい」と言っていた。</li> </ul>
つき組 (5歳児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>みんなが関われた。全員で遊んだこと、触れ合ったこと、ペアリングしたことが有効であった。</li> <li>中学生がお弁当の時と大違いで、何とかしようとしていたのが印象的だった。</li> <li>幼児がいろいろな人を知る良い機会になるのではないか。</li> </ul>
すみれ組 (4歳児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>ブル後の着替えを急がせて遅れて行ったが、そのハイテンションのまま活動できた。</li> <li>パンが食べられてよかったという感想があった。</li> <li>招待状を前から教室に飾って楽しみにしていた。</li> <li>雰囲気があたたかかった。</li> </ul>
さくら組 (4歳児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ブースを自由に選ばない」と言われても自由に選べない園児はいる。</li> <li>ワニたたきゲームが一番人気があり楽しんでた（長い列ができていた）</li> <li>お弁当交流会では友だちの陰に隠れてお弁当を一口も食べられない子がいたが、今回は戦いごっこなどで楽しんでいた。</li> </ul>

表4 幼稚園教諭からの感想・コメント

1組	<ul style="list-style-type: none"> <li>全員で取り組む活動2つ（じゃんけん列車、しっぽ取りゲーム）はよかった。最後の「しっぽ取りゲーム」は、「もっとしたい」との幼児の声があった。</li> <li>クラッカーのトッピングには呼びかけてもあまり集まらず、紙飛行機つくりによく集まった。</li> <li>司会の生徒がうまく仕切っていた。</li> </ul>
2組	<ul style="list-style-type: none"> <li>鬼ごっことドッジボールは難しい。ドッジボールはルールを改良する予定だったがしなかった。鬼ごっこはルールが伝わっていなかった。</li> <li>新聞じゃんけんはおもしろかった。</li> </ul>
3組	<ul style="list-style-type: none"> <li>一番意欲が低かったが、途中から意欲的になった。ハプニングがありながら一番楽しかった。</li> <li>中継ぎにリフティング、小ネタ、歌を予定していたが、時間が足りず、リフティングが少ししかできなかった。</li> <li>勉強が得意でなく寝るなど授業に参加しないことが多い生徒が、活き活きしていた。</li> </ul>
4組	<ul style="list-style-type: none"> <li>6つのブースのうち5つが食べ物系であり、ワニたたきゲームグループは開始前は「『つまらない』という自信あり」と言っていたが、一番人気のブースだった。</li> <li>本当は食べ物を作る過程を体験させるのがおもしろいの、「準備をしっかりしなさい」と言い過ぎたのか、園児の関わりが少なくなってしまう、おもしろくなったのかもしれない。</li> <li>サンドウィッチ班の生徒が家に帰って「子どもたちがあまり来なくて（人気がなくて）残念だった」と母親に話していた。この班は、アレルギーに気を付けてハムを選び、原材料表示を幼稚園の先生に見せるなど事前準備に取り組んでいた。</li> </ul>

表5 中学校教諭からの感想・コメント



なお、2つの実践およびその企画段階の中学校の授業には大学教員が参観者として出向いた。

参観者からみた2つの実践について、下記にまとめる。

### (1) お弁当交流会

園児がホールにて3人ほどのグループをつくり、シートに座っているところへ、中学生が4～5名ずつ座っていくが、その時点で、園児と交互に座るグループ、園児と中学生が分かれて座るグループと、まちまちであった。そして、食事中も、自分の好きなキャラクターなどの話をとりとめもなく続ける園児もいる一方で、中学生に圧倒されたのか固まって動けない園児もいた。また、中学生も、園児の緊張をほぐそう、あるいは園児に興味を持たせようと、お弁当に入っている食品について園児に問いかけたりしている生徒もいる一方で、園児とどうかかわってよいのかかわらずに、困った様子の生徒もいた。

最初の回(5月9日)では、中学生は制服を着用しており、園児は黒い服の集団に圧倒された様子もあったが、2回目以降は体操服や夏服の生徒が多くなってからの訪問であったため、幾分和らいだ雰囲気となった。また、1回目の交流会では、お互いがごこちない雰囲気だったため、その時に撮影したビデオを、2回目以降に訪問する中学生のクラスで視聴させた。そのため生徒自身が園児への接し方について事前に気持ちの準備を整えることができたと思われる。

これらの交流会からは、園児も生徒も当初は緊張している様子が伺えた。ただし、比較すると、積極的に関係を作ろうとしている数は園児の方が多かったといえる。とくに、自己中心的に話を聞いてもらおうとする園児がいると、中学生は受け身の立場で対応してしまうことが多かった。そして、園児との会話に慣れている生徒とそうでない生徒、園児と会話するよりも生徒同士で会話をしてばかりいる生徒、園児と関わりを持とうとしている生徒と黙々とお弁当を

食べている生徒などさまざまな顔が見られたが、中学校の担当教諭によれば、それらは普段中学校で見せる顔とは異なったものであったという。具体的には、中学校ではしっかりしているが、園児の前でどうしてよいかわからず立ち尽くす生徒や、ほとんどの授業には消極的であるが、中学校教諭も驚くほど園児と積極的にかかわろうとしている生徒などがいた。

今回の交流においては、園児も生徒もともにお互いの「関係づくり」に気持ちが向いており、各自のお弁当の中身や量の比較に関する声は、参観者にはあまり聞こえてこなかった。

### (2) 幼児を招こう

本取り組みは、お弁当交流会とは異なり、中学生が主体となって園児を招くというものである。お弁当交流会の際には、中学生同士で固まって話をしたり、特定の(よく話をする)園児のペースで中学生が聞き役となっていたり、と受け身的な中学生も多く見られたが、今回は招く側ということで、中学生は意欲的に園児と関わっていた。企画案の検討については、まずグループ毎に内容を考え、次にクラス全体でどの企画をどのように実施するのか、役割はどうするのかなどを決めていった。また、企画を立てるにあたって、「食」関係の企画を出したグループは、アレルギーの問題などにも配慮し、幼稚園教諭に子どもたちのアレルギーの有無などを事前に確認したり、ドッジボールなどのゲームを提案していたグループは、幼児がルール等をどの程度理解できるのかについても事前に幼稚園教諭に確認したりしていた。幼稚園教諭からのアドバイスを受け、企画内容を若干修正したグループ、または変更したグループ、さらには企画自体をあきらめたグループなどさまざまであった。企画を断念したグループであっても、当日は司会や送迎などを担当する役となるなど準備段階から積極的に参加し、クラス全員で協力して園児を迎える体制を整えた。

各クラスの企画内容は、4クラス中3クラスは「食べる」企画を準備していた。そこには中

学生の「食べる」ものを用意すれば、幼児もそこにあつまるとの思い込みがあったと思われる。しかし、実際は、園児は「食べる」ことにはさほど関心を抱かず、むしろゲームや制作の方に関心が集中していた。

園児も生徒もお弁当交流会と同じ顔ぶれだったことにも起因するのか、あるいは、夏服となり、黒い学生服の威圧感がなかったことに起因するのか、あるいは生徒に関しては自校のホールだったからなのか、活動内容が適していたのかその理由は未確認であるが、お弁当交流会のときと比較すると、緊張の度合いは全く異なっていた。園児も元気に動き回り、生徒の企画したイベントにも、目を輝かせて参加していた。お弁当交流会の時には、緊張からか中学生の前でお弁当を全く食べることができなかった園児が、招く会の時には楽しそうに遊ぶ姿も確認できた。一方で、生徒の方も、受け身的であったお弁当交流会とは異なり、積極的に園児に関わろう、自分たちの立案した企画を成功させようとしている姿勢が見受けられた。食べ物を扱うクラスでは、教師が指示したわけでもないのに、保護者への手紙を準備するなど、意欲的に取り組んでいた。

## 5. 本実践の成果と課題及び意義について

以上から、次のような成果と課題が確認された。

### ①「場の実践」に関して

園児に関しては、自園のホールでのお弁当ではあったが、初対面の中学生を前にして食事のすすまない子どもも見られた。逆に、中学校のホールに出かけたときは、2度目であるからか、臆することなく関わるができたように思う。

今回は、自校園・他校園と場所が異なることによる影響までは検討することができなかった。

ただし、家族以外の人、とくに地域社会における異年齢集団とのふれあいが減少しているといわれる昨今、異校種間の園児・生徒が同じ場で交流することは、園児・生徒の双方にとって

非常に意義があるものと思われる。

### ②「学習・保育内容」の連携に関して

前述した通り、本研究ではできる限り各校園が現在取り組んでいる実践、あるいは授業内容の延長に異校種間の連携実践の実現を図ることとした。

その結果、「幼児と触れ合う」「いろいろな人とのかかわり」のそれぞれの学習・保育内容において十分な成果を挙げることができたといえる。

なお、上記も踏まえて、本研究では次のような意義が見いだせた。

・各校園が現在取り組んでいる実践、あるいは授業内容の延長に異校種間の連携実践の実現を図っていったため、学校園の教員の負担感が過多となることはなかった。また、各学校園で現在どのような取り組み・授業が行われているのかを聴くことで、自校の授業へのヒントや学習内容の連携の必要性を考えることが可能となり、教員も意欲的に取り組むことができた。

・今まで機会がなく異校種間の十分な交流が実現していなかった本附属学校園であるが、大学教員が積極的に関わることでその‘きっかけ’を作ることができた。冒頭に記した通り、本実践は技術・家庭科小委員会における議論から実践に結びついたものであるが、本委員会は連携を推進する委員会である。その意味では本小委員会は一定の成果を果たしたといえよう。

最後に、幼稚園担当教諭と中学校担当教諭の双方から、幼児にとっても生徒にとっても意味があるので、方法・内容をさらに改善しながら次年度以降も続けた方がよいという意見が出ており、本実践の意義は大きかったと考える。

なお、今後は今回の実践を踏まえたうえで、幼・小・中3校の連携について検討を進めていく。

<sup>1</sup>小柳和喜雄 「異校園連携を効果的に進めるための壁と道具に関する考察—幼保小中連携の実践的な取組から得られつつあること—」 奈良教育大学教職大



学院研究紀要「学校教育実践研究」 4, 67-70, 2012

Ⅱ 桑畑美沙子，宮瀬美津子，田口浩継，石川由里子，隅田博美「異年齢集団のコラボレーションによる食育システムの構築(1)：幼児に焦点をあてた食育実践の取り組み」熊本大学教育実践研究 24, 127-133, 2007.

宮瀬美津子，田口浩継，桑畑美沙子，村上正祐，平川尚子「異年齢集団のコラボレーションによる食育システムの構築(2)：小学校低学年に焦点をあてた食育実践の取り組み」熊本大学教育実践研究 24, 135-141, 2007.

田口浩継，桑畑美沙子，宮瀬美津子，萩嶺直孝，隅田博美「異年齢集団のコラボレーションによる食育システムの構築(3)：中学生に焦点をあてた食育実践

の取り組み」熊本大学教育実践研究 24, 143-151, 2007.

Ⅲ 本年度の附属幼稚園の「食育」の取り組みは、「保護者と共につくる“食育”」がテーマであり，園では今年，保護者でつくる食育サークルと協力して，夏野菜を入れたピザをつくって食べる夏野菜パーティーを実践したり，トマトやサツマイモ，その他の野菜の苗植えから収穫・調理を季節に合わせて実施している。また，これまでも多くの実践の蓄積がある。(全国国立大附属学校連盟幼稚園部会「附属幼稚園における健康な心と体を育てる“食育”の取組」国立大学附属学校園からの提案7（リーフレット）6, 2012., 中口貴子「保護者と共につくる食育」金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園研究紀要 58, 65-70, 2012.)